

OBON 2015

Returning personal items to their families.

個人の遺留品をご遺族の元へ



EVERYONE HAS A FAMILY

誰でも一人一人に家族がいます

OBON 2015: お詫び

ニュースレターが延滞し、数ヶ月間に渡りお届けできなかった事をお詫び申し上げます。

2 ページ目以降の内容を見ていただいてご理解して頂けると幸いです、私たちは、今夏多忙を極めておりました。

目次

2ページ: WWII 元米兵

3ページ: 旅

4ページ: 日本、東京

5 & 6ページ: 遊就館訪問

7~10ページ: 返還

11ページ: 米国上院議員の手紙

12ページ: OBON 2015 連絡先

WWII: 1941-1945

第二次世界大戦国立博物館のウェブサイトにも、興味深い事が書かれています。

1945年には、1千220万9,238名のアメリカ軍人が、軍の仕事に携わっていました。

今夏に私たちは、この内の6名とお会いして、親睦を深められたことに感謝しています。



エド・ジョハン



ポール・ボーガー



ハラルド・ラドウーク



ヴァーン・トンプソン



ダラス・ブリット



エルドン・シールズ
(写真入手不可)

私たちは、戦後70周年記念として来日し「寄せ書き日の丸」返還の計画をしていました。
その際、私たちと一緒に非公式大使として同行して頂ける方がいるとよいのではと考えました。

日本へのフライトは、10時間の長旅で、若い人たちにとっても大変です。

元米兵たちに同行して頂けるかお伺いしたところ、皆さん喜んで同意をして下さいました。

同行者の中で、一番お若い方でも、89歳というご高齢でした！

旅

六名の元米兵たちと、その同伴者（家族や友人）と出発の前夜、タコマのホテル、ホリデーイン・エクスプレスに集合しました。翌朝に全員が、送迎車に乗り、シアトル空港へ向かいました。車中で、ダラス・ブリット（写真下）は、息子のスマートフォンで、人生で初めてのグループセルフィーを撮られました。



(前列左から) Harold・ラドウィック、ダラス・ブリット、ポール・ボーガー
(中央左から) デイブ・ブリット、ヴァーナ・ブラディー（同伴者）
(後列左から) タミー・ウィンターフィールド、キース・ボーガー（同伴者）



出国管理局の審査通過時には、私たちのグループに敬意を表し親切に配慮してもらえたお陰で、出国ゲートへは余裕をもって到着することができました。

(写真下) デルタ航空は、元米兵たち全員の足が伸ばせるよう通路側の席を手配してくれました。エルドン・シールズへ声をかけるレックス・ジーク



長旅を快適に過ごす ヴァーン・トンプソン

(写真下) 敬子・ジークは、フライト中に度々元米兵たちの席まで来て、確認をしました。敬子が、エド・ジョハンへ冗談を言っているところ



東京

元米兵たちで、日本にいた最後は1946年のことです。時代と共に変化したこと。変化しなかったことを含めて彼らにとっては、何もかもが新鮮で、驚きに満ち、興味を持たれました。



遊就館訪問

私たちは、元米兵の皆さんには、なるべく広く様々な経験をして頂けるように努めました。買い物や神社参拝、庭園の訪問、また新幹線にも乗車しました。日本人の観点から作られた第二次世界大戦の展示がある遊就館の事を、尋ねてみる事には、彼らにとって抵抗があるかもしれないと、幾分か躊躇しましたが、結果は全員が来館してみたいと熱望されました。よって、皆さんを案内させて頂いた所、私たちが日本に滞在した工程でのハイライトの一つとなりました。遊就館の展示課長 自らVIP ツアーとして、元米兵の皆さんへ案内、説明をして下さいました。



(左から) エルドン・シールズ、ダラス・ブリット、エド・ジョハン、ポール・ボーガー、ハラルド・ラドウーク、ヴァーン・トンプソン

後ろに見えるのは、修復された零戦です。元米兵の皆さんは、零戦をよくご存知で、零戦の精密な構造スピードが出る操縦性に、アメリカが追いつけるまでに数年以上もかかったそうです。



中には具体的な質問をされる方もいました。ヴァーン・トンプソンは、二人乗りの潜水艦が船を撃沈したのを目撃されましたが、後に自身が乗艦していた船の真下に潜んでいたという事実が発覚した体験を忘れることができませんでした。



彼は、遂に二人乗りの潜水艦の模型を見つけました。当時の彼の体験が蘇り、船下に潜んでいた日本軍の潜水艦を撃沈させる為に、応援にきた味方護衛艦らが船の周りを取り囲んで、潜水艦を攻撃をした話を語られました。

遊就館訪問

米国の元海兵隊であったエルドン・シールズは、戦闘に関わった太平洋の島々で、海兵隊が愛称としていた日本軍の戦闘機「ベティー」によって、度重なり攻撃されました。エルドンは、色々な模型が陳列された展示品を見ながら、「ベティー」の模型を近くでじっくりと確認することができました。



もちろん日本人が「ベティー」と名付けた訳ではありません。敬子が遊就館 展示課長の詳細説明を通訳した結果、エルドンが話しをている戦闘機は、三菱製のG4M の爆撃機ではないかと推測されました。



その後、エルドンは日本兵が家族宛に書いた手紙の英訳を見つけました。何通かの手紙を読んだ後に「これらの手紙は、自分が家族へ書いた手紙の内容と同じだ」と言いました。さらに続けて、手紙の一つ一つ読み終えて、「自分もこの中で書かれた手紙と同じような内容を家族へ書くことができただろう」と言いました。

返還

2015年8月、私たちの今回の日本への旅の目的は、「今までで最も意義深い寄せ書き日の丸の返還」にありました。同行した元米兵の方々は皆、このプロジェクトに大いに賛同、大変な協力をして下さり、平和と和解の親善大使となることを切望していました。

ダラス・ブリットは、今回、返還をした中の1枚である日章旗について、彼が当時、回収し持ち帰った時のことをよく覚えていました。同行したエルドン・シールズ、ポール・ボーガーとダラス・ブリット（写真下左側）は、当時のダラスの回想話に耳を傾けました。そして敬子は、70年以上も前に書かれた家族のメッセージや署名を皆に英訳をして説明をしました。



同行した元米兵と、その付き添いの皆さんが、今回 返還された70枚のうちの14枚の旗を掲げています。

返還

OBON 2015の活動を開始した当初から、私たちは、戦後70年の節目に合わせて、70枚の寄せ書きの丸を、東京にある正式な機関へ返還し託すことを計画してきました。しかし、まさか日本の総理大臣に面会できるとは夢にも思っていませんでした。

米国大使館などの支援等が無いにも関わらず、手紙やOBON 2015協力者等を通じて、何とか首相官邸に接触することができ、その後、面会の許可が下りたのです。



首相官邸は外部から見えないよう、高い壁と植木によって完全に囲まれていました。守衛のいる門を通過すると、大きな中庭が現れ、その後ろに5階建ての近代的な建物が現れました。これが、内閣の重要な会議が行われ、各国の要人が訪れる首相官邸でした。私たちは、その官邸の目の前で降り、大勢のメディアの人々の中を通り、安倍総理大臣をお待ちするため、上の階にある会見の場に通されました。



ここで私たちは、詳細にわたる指示を言い渡されました。来日者の同席の許可は、たった二人の元米兵と2人の付き添いのみでした。持参した70枚の旗は、15個の白い箱に収め、3列、5段重ねにし、1枚のみ、一切、旗に記載されている名前等が見えないようたたんで、箱上に置くよう指示がありました。大勢のテレビレポーターや、記者たちの視線が入り口から私たちに向けられ、緊張した空気が漂っていました。

返還



やがて、総理大臣がお出ましになり、大勢の記者たちのカメラのフラッシュが一斉に激しく光りました。総理はレックス & 敬子・ジークと2人の元米兵らにご挨拶をされました。レックスは、数分に渡り、このプロジェクトの目的、そして、アメリカにいる元米兵とその家族たちが、日章旗返還を通じ、日本の戦没者遺族たちの傷が少しでも癒えるように望んでいることを総理大臣に説明しました。レックスは、箱の上にたたんで置かれた代表の1枚を総理大臣にお見せしました。

(写真：左から) 海軍退役のハロルド・ラドューク、陸軍退役のダラス・ブリット、敬子・ジーク、レックス・ジーク、安倍総理大臣、厚生労働大臣、日本遺族会会長

安倍総理大臣は、ジーク夫妻に直接、OBON2015の活動について、お言葉を下さいました。



まず、日本兵の寄せ書き日の丸の返還運動をされておられる、ジーク夫妻とそのサポーターの皆様、日本を代表して、ご遺族への返還のためにお時間を頂いたことに感謝致します。

ご遺族にとっては、ほとんど遺品が残されていない中において、今回この日章旗を返還して頂くことは、ご遺族にとって極めて大切なことであります。

かつて日本と熾烈な戦いをを行った米国のジークご夫妻、そして元兵士の方々も一緒に、この日章旗を返還して頂いたことは、大変感慨深いものであります。

今年4月、米国の上下両院の合同会議において「希望の同盟」の演説を行いました。戦後70年を経た今日、日米両国は、二度と戦争の惨禍を繰り返さないために、お互いに協力をして、平和な世界の構築のために共に協力をしていきたいと思いますし、今回こうした日章旗が返還されることも含めて、70年前に思いを致しながら平和構築のために努力をしていきたいと思っております。

2015年8月4日

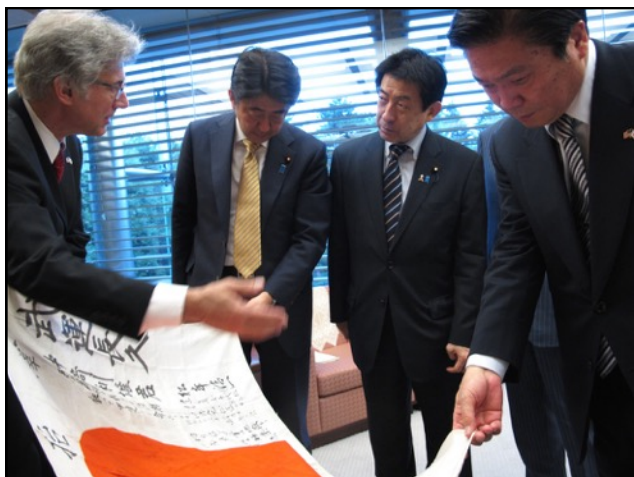
内閣総理大臣 安倍晋三

返還

安倍総理大臣のお言葉の後、メディアの人々は部屋の外に退出し、大きなドアは閉められました。そのとたん、厳格なムードは一転して、和やかなムードとなり、安倍総理大臣も上着のボタンをはずされました。安倍総理大臣はとてもやさしく、寛大なお方でした。総理はさっと立ち上がり、さきほどの1枚の日章旗を広げ、文字を解読し始めました。



総理は、「父よ、元気で頑張れ」という、その旗の持ち主の子供によって記されたであろう記載に目をとめられました。「これは恐らく子供たちを中心に、友人、家族が思いを込めて名前を書いているのだと思います。」と仰られました。



安倍総理は、仰いました。今日でも114万人の日本軍兵士が未だに「未帰還」となっています。そして、その裏には、さらなる多くの遺族たちがいるのです。この日章旗の返還は、事実上、残された遺族にとって家族を失った悲しみを乗り越える唯一の希望なのです。



これらの写真は、この夏、OBON2015の活動によって返還された日章旗とその遺族の方々です。

米国上院議員の手紙

MARIA CANTWELL
WASHINGTON



United States Senate

WASHINGTON, DC 20510-4705

2015年8月11日

Keiko and Rex Ziak
AVA/OBON 2015
P.O. Box 282
Astoria, OR 97103

親愛なる 敬子 & レックス 様

この度、第二次世界大戦中に米兵が持ち帰った思い出の品々を再び日本のご家族の元へ返還する活動をされて、無事ご帰国されたこと、心より嬉しく思っております。ご遺族の元へ届けられた大切なご遺品は日米文化の架け橋となるものであり、その返還活動を通して両国の絆はさらに強化されることでしょう。

「寄せ書き日の丸」の返還は多くのご家族に心の安らぎをもたらすことと思います。お二人と同行された元米兵にとっても、今回の旅は人生を変える貴重な体験だったに違いありません。日本のご遺族と、平和的で強い関係を築くためのお二人の並々ならぬご努力、また特にご遺族の皆様が「家宝」を取り戻せるようご努力を傾注されている事に対し、心から感謝を申し上げます。

お二人の献身的なご活動は、日本と米国双方において多くの人々に良い影響を与えています。かつて愛する者から奪われた日章旗を再びご家族の元に返すというお二人が始められた働きは、今後も両国の関係を強め続けてくれることと思います。元米兵にとってもそれは、戦中および戦後のそれぞれの思いと向き合い、整理するための具体的な機会となることでしょう。改めて感謝を申し上げます。

感謝を込めて

米国上院議員

マリア・キャントウェル

(*注：この手紙の原文は、ニュースレター秋号の英語版でご確認いただけます)

PRINTED ON RECYCLED PAPER

OBON 2015 へのお問い合わせ

OBON 2015 へのご支援のお願い

OBON 2015 は、日章旗の提供者からご遺族の搜索、返還に至るまで無償で行っております。

皆様からの寄付金は、OBON 2015 の活動資金の財源として有効に活用させていただきます。

皆様のご支援とご協力に、心より感謝を申し上げます。

<ゆうちょ銀行>

記号：14450 番号：16577781

名前：オボンニセンジュウゴ

<他金融機関>

店名：四四八（ヨンヨンハチ） 店番：448

口座番号：1657778

口座名：オボンニセンジュウゴ

「寄せ書き日の丸」を所有されている方をご存知でしたら OBON 2015 へご連絡下さい。

私たちは、ご遺族へ返還できるよう、お手伝いをさせていただきます。

<連絡先住所とメールアドレス>

OBON 2015

P.O. Box 282

Astoria, Oregon 97103

contact@OBON2015.com



終戦70年を記念する平和的イベントとして、健康や旅のリスクを克服し同行して頂いた六名の元米兵の皆様へ OBON 2015 のスタッフ一同、心から感謝を申し上げます。正に彼らは「最高の世代」と呼ばれる見本となる人たちです。

(写真前列左から) ポール・ボーガー、ヴァーン・トンプソン、エルドン・シールズ

(写真後列左から) ハロルド・ラドウーク、ダラス・ブリット、エド・ジョハン